

生成AI、大規模行動モデルで自律AIに近づく

◆1to1マーケティングを加速するLAM

NTTとNTTドコモは、2025年11月12日に顧客の多様な接点（アプリ、店舗など）で取得される時系列行動データを活用して個別のニーズを予測する大規模行動モデル（Large Action Model:LAM）を確立したと発表¹した。大規模言語モデル（Large Language Model : LLM）は言語を理解・生成するAIであるのに対し、LAMは状況を判断し行動や操作を提案もしくは実行するAIであると言える。NTTとNTTドコモの取り組みでは、顧客データは「誰が／いつ／どこで／何を／どうした（4W1H）」形式に統一され、顧客の行動順序やパターンを学習することで、属性ベースのセグメントマーケティングと比較して、より精密な1to1マーケティングを実現し、かつ顧客対応の業務改善を図っている。

LAMの応用可能性は広く、医療分野の電子カルテ解析やエネルギー分野の発電予測など、時系列データが重要な領域への展開も検討されている。

◆トヨタとBoston Dynamics、人型ロボットで大規模行動モデルLBMを実証

25年8月20日、トヨタ自動車の米研究開発子会社Toyota Research Institute（TRI）と米Boston Dynamicsは、ヒューマノイドロボットAtlasを用いて大規模行動モデル（Large Behavior Model : LBM）を実証²したと共同発表³した。LBMは、ロボットがセンサーを用いて人間の動作を観察し、状況に応じて適切な動作を自律的に判断・実行することを目的としたAIモデルである。

従来、ヒューマノイドロボットの歩行やバランス制御、腕の操作などは手作業で個別にプログラムされてきた。本プロジェクトでは、新たなコードを記述することなくLBMがロボット全体を制御し、荷造り、仕分けなど複雑な動作を実現した。人の動作デモから迅速にスキルを学習させることで、手動プログラミングを不要にし、汎用ヒューマノイドの実現を加速させるアプローチは、人間環境で多様な作業をこなすロボットの実現に向けた重要な一歩であることを示している。

LAMとLBMの進展は、人と環境を理解し行動する自律AIの実用化を大きく前進させつつある。

【小坂博幸】